愚考考古学（二七）

伊能忠敬測量日記から

中林幸夫
（会員　香川県綾歌郡国分寺町）

私は、佐伯海上保安署に在職中、津久見市から大分・宮崎県境までの海岸線を、陸上・海上を通して一〇回以上見てまわった。

その都度、昔歩いて海岸線を測量した伊能忠敬を思い出し、「測量日記」を読み返した。

戦後、車の発達で道路が整備され浦々の生活は一変したが、それまでの交通は船便のみで、食料品の買出しも思うにまかせず、肉を食べたのは盆と正月くらいと聞いている。

現在、人家がありながら車で行けないところは、鶴見半島の芳ヶ浦だけではなかろうか。

今日でも佐伯から西野浦への道路を走っていると、目の前を野生のサルがのっしのっしと歩いているのに出くわす。

サルといえば、米水津湾で釣舟が転覆して乗船者が行方不明になった事故があった。そのとき捜索中の人が海岸に血痕が落ちているのを発見、それが山の方に続いていて、遭難者は負傷し山の方に行ったのではないか、ということになり山を捜したこともあった。

血痕は病院で鑑定したところ、たしかO型であるがサルのものであると判定され、後日遭難者は海中から発見された。

このとき、はじめてサルに血液型のあることを知った。

南郡のあちこちで野生のサルを見るたびに、昔から住んでいながら数が増えていないのは、充分な食料がないからであろう。

このように南郡一帯の海岸部は平地が少なく、食べ物を充分に収穫することができない。

海岸の浦辺の地に人が住んだのは遠い昔からと思われるが、サルよりは後であったと思う。

御手洗一而氏が「独立国佐伯」で書いているように、僻地での生活を余儀なくされた落人や流着者で、食料事情の悪い生活環境と、世間から隔絶した土地での生活は

大変なものであったと思う。ひえつき節の椎葉の里どころではない。

伊能忠敬の測量日記を見ると、浦々の人家の数が書かれた部分がある。

人家一軒とか二軒と書かれているのは彼が見て、こんな所にも人が住んでいるとの意味あいではなかろうか。

約二〇〇年前の文化七年(一八一〇)に書かれた日記を見ると各浦に庄屋がいて、伊能等の世話をした庄屋社会が形成されている。

庄屋社会の形成は、一六四九年江戸幕府の命令によるもので、納税・犯罪等の連帯責任を負わせる五人組制度からであろう。

日記に記載されている当時の海岸部の庄屋を整理してみると次表のようになった。

文化7年(1810)測量日記

村浦名	役名	氏名	備考	文化7年調べ		明治41年調べ	
				戸数	人口	戸数	人口
上浦町				190	1,776	920	
蒲戸浦	庄屋	平兵衛	字ノウガ内人家3軒	15	98	301	
福泊浦	〃	与惣兵衛		50	295		
津井浦	〃	吉之丞	止宿一向宗真栄寺	―	441	225	
浅海井浦	〃	又右衛門		125	942	394	
西上浦							
宮野内浦	庄屋	三右衛門					
代後浦	〃	萬右衛門					
古江浦	〃	儀兵衛	止宿庄屋儀兵衛 別宿百姓三左衛門				
笹々良目浦	〃	武右衛門					
晞干浦	〃	弥太郎					
海崎村	大庄屋	江藤林左衛門	中河原人家5軒	179	939		
下野村	〃	染矢孝右衛門					
狩生村	〃	弥左衛門	小福良人家6軒 アコ浦人家1軒	78	451		
			間越人家1軒 落網代人家1軒				
戸穴村	〃	助右衛門		193	970		

村浦名	役名	氏名	備考	文化7年調べ		明治41年調べ	
				戸数	人口	戸数	人口
大入島				255	1,852	635	
日向泊浦	庄屋	六左衛門	夷浦・二五浦・高杉浦	41	316	93	
塩内浦	〃	右衛門		30	338	59	
守後浦	〃	吉兵衛		14	101	75	
高松浦	〃	平兵衛	止宿禅宗大休庵 脇宿百姓十兵衛	56	315	96	
片神浦	〃	孫兵衛		32	214	68	
久保浦	〃	七兵衛		13	96	48	
石間浦	庄屋	儀兵衛		24	150	73	
荒網代浦	〃	与兵衛		45	322	123	
佐伯領	大庄屋	芦代（苅） 八郎兵衛	止宿領主客舎 本町宮崎儀右衛門	(総人口)	52,480	(仝左)	82,952
			脇宿船頭町 栗屋新左衛門				
	惣庄屋	吉野平左衛門					
預所							
津志河内村	庄屋	宇左衛門					
柏江村	〃	権五郎					
鶴見町				501	3,375	1,409	
吹浦	庄屋	治郎兵衛		67	375	153	
地松浦	〃	長左衛門	止宿百姓嘉左衛門・平蔵 中河原人家2軒	73	471	222	
沖松浦	〃	弥八郎		35	222	117	
桑野浦	〃	幸右衛門		20	125	有明浦 222	
日野浦	〃	利兵衛		34	214		
帆場浦	〃	宇左衛門		22	119		
鮪浦	〃	甚太郎	大松人家1軒	32	180		
羽出浦	〃	幸八		67	371	150	
中越浦	〃	茂助		42	268	141	

村浦名	役名	氏名	備考	文化7年調べ		明治41年調べ	
				戸数	人口	戸数	人口
丹賀浦	中浦組 大庄屋	初左衛門	止宿百姓甚十郎 〃　源太	89	588	246	梶寄浦を含む
大島浦	庄屋	甚之丞		20	442	158	
米水津村				285	2,325	886	
浦代浦	庄屋	—	田鶴人家10軒	87	619	284	
竹野浦	〃	—		28	244	97	
小浦	〃	—		34	264	115	
宮野浦	庄屋		間浦人家1軒	51	450	159	
色利浦	大庄屋	御手洗与七郎	大内浦人家10軒 関網人家4軒	85	748	231	
間越浦			間越人家5軒	—	—	—	
蒲江町 上入津				388	2,893	812	
本郷 畑野浦	大庄屋	富田達右衛門	止宿大庄屋方	150	1,004	221	
西野浦	庄屋		州ノ本人家5軒 越ノ浦人家2軒	118	850	313	
竹野浦	〃			80	705	208	
楠本浦	〃		小向人家1軒	40	334	70	
蒲江町 蒲江				526	3,314	—	
本郷 蒲江泊浦	大庄屋	御手洗嘉蔵	止宿大庄屋方	198	1,174	410	
河内浦	庄屋			30	253	—	
猪串浦	〃			26	213	82	
坪浦	〃			9	60	—	
野々河内浦	〃			31	202	—	
森崎浦	〃			63	382	111	
丸市尾浦	〃		内浦之泊人家22軒	86	543	128	
葛原浦	〃			40	236	70	
波止津浦	〃			43	251	56	

総庄屋(吉野氏)－大庄屋(各村浦1名)－庄屋(各村浦共複数)

右の表を見ると、文化七年（一八一〇）と明治四一年（一九〇八）の間約一〇〇年間に、各浦の戸数は三倍以上になっている。

急激に戸数・人口が増加した理由は何だったのだろう。産業の発達か、それとも政策か自然増か。

日記から見ると浦関係の役人は

浦奉行（浦支配役）浅澤弘右衛門

郡奉行（地方役）天谷甚左衛門

の下に惣庄屋一名、大庄屋六名、庄屋四七名、（佐伯領所二名を含む）の計五四名がいたことになる。

この庄屋制度を見て感心させられるのは、少ない役人により納税と犯罪防止を完璧にしていることである。

これに比べれば現在の行政職員（公務員等）は多すぎて完璧でないような気がする。

庄屋は武家社会との関係を良好に保持しながら、地域住民をまとめて冠婚葬祭の世話は勿論のこと、民衆の信仰や、寺社への協力に努めた功績は、権力を持って物事を行使した役人以上のものであったろう。

江戸時代の庄屋を中心とした浦辺社会を調査することによって、別の歴史がわかるかも知れない。

浦々の庄屋の末裔さん、言い伝え等歴史の発掘に努めてくれませんか。

今でも信仰厚く、八日薬師でにぎわう

蒲江浦の東光寺（一六四四年創建）

畑野浦の福泉寺（一六一三年〃）

米水津村の大願寺（一六二四年〃）や養福寺・潮月寺の過去帳に眠る人々、何か話してくれませんか、苦労話が歴史です。

佐伯史談に海部の地理や産業に関することを書かれておられる、矢野弥生氏と市野瀬仁氏の記事を読むたびに、浦辺の昔を考えさせられる。

最後に、伊能忠敬一行が文化七年三月三日上浦町に入り、休みなく海岸を歩き続けて測量し、四月二日に蒲江町を去るまでの間には、庄屋をはじめ住民も一行の世話に大変だったと思われる。

一行は一八名と言われているが、地元の船頭・人足等を加えると、二五名くらいにはなったと推定される。

昔の田舎のこと、食料の準備から炊出し、什器や寝具の世話まで気にかかる。

それに止宿する家のことも大変だったと思う。百姓の

家の広さはしれている。

四月二日の送別の日に集ったと思われる者の名前は、

測量一行
伊能勘解由(忠敬)
坂部貞兵衛
下河辺政五郎
青木勝次郎(絵師)
永井要助
梁田栄蔵(弟子)
上田文助(〃)
箱田良助(〃)
成田豊作(侍、途中不束により暇を出された)
松井沢治(侍)
恩田藤吉(〃)
平助(竿取)
長蔵(〃)
中間(ちゅうげん)五名(雑用人)
計一八名
中谷作太夫(船頭)佐賀関
林甚五郎(船頭)佐賀関
伊藤直蔵(〃)
弥平(鑓持)
兵吉(床机持)
御手洗嘉蔵(蒲江大庄屋)
大畠仲右衛門
李野善五郎
塩飽屋(姓は東)弥惣兵衛(佐伯用達)
名古屋(〃今泉)善左衛門(〃)
加島屋(〃東)平兵衛(〃)
他
浦々庄屋
佐伯領人足・助合
等であった。

測量の苦労に賛辞を送ったことであろう。

測量の翌々年の文化九年には、佐伯領内で重税にあえぐ農民が一揆を起こしている。

書物によれば、庄屋制度は近世から明治まで続き、身分は百姓であるが格式は一般村民よりも高く、屋敷に門、母屋に式台、瓦葺で着物には絹物、履物も雪駄(せった)が許され

ていた。

主要な仕事は、

村民の統制と保護

村民を代表して他村との交渉

領主への請願（一揆等のとき村人を代表して領主に請願する）

年貢、村入用の割当、納入

領主からの帳簿（文書）の伝達、願書の作成

村人相互の土地の移動

等であった。

そのため、当然ながら読み書き算用の能力が必要とされ、神職・僧侶と並ぶ地位にあった。

人数は一村一名が原則とされていたが、浦辺の庄屋の数は多いようである。

はまゆうの花　浜風に　砂をふむ

幸夫

表紙解説

伊能忠敬の第一次大分県下の測量着手は、文化七年（一八一〇）正月二十二日中津藩に始まり、宇佐を経て国東半島を巡り杵築・日出・別府・府内・佐賀関・臼杵・津久見と海岸部を測量、三月七日佐伯城下に着いている。途中臼杵領測量のとき、現在の津久見市堅浦にある海岸寺（当時は臼杵藩祈祷寺の一つで「寂光院」といっていた。）で中食をしたことが測量日記に残されている。

写真の石柱は、海岸寺裏の庭園にあり、穂の長さ一九六センチメートル、一辺二十七センチメートル角の灰石で造られ、五十一センチメートルの高さの台座の上に建てられている。右側面には

文化七庚午年二月　従者

坂部貞之丞（日記には「坂部貞兵衛」となっている。）

下河部政五郎

青木勝次郎　永井要助

門弟子四人　侍四人　家来五人

の陰刻がされている。（建立年不詳）

現住職の話によれば、寺には記録が何も残ってないが、伊能忠敬より銀一両の寄進があったと伝えられており、かなり潤沢な資金を用意していたのではないかと話していた。

いずれにしても人生五十年とされた時代の五十六歳から七十四歳で没する直前まで、およそ十八年間、日本全土を歩いて測量したその労苦の程は、想像を絶するものであったろう。あらためて、その偉大な業績と行動力・精神力に頭が下がるのみである。

（吉田　齊次郎）